

おきくと弟

小川未明

青空文庫

空そらが曇くもっていました。

正しょうちゃんが、学がっこう校へゆくときに、お母かあさんは、ガラス戸どから、外そとをながめて、

「今日きょうは、降ふりそうだから雨あまマントを持もつておいで。」と、注ちゅう意いなさいました。

「じやまでしかたないんだよ。もしか、降ふつたら、一、二つと駈かけだしてくるから。」と、答こたえて正しょうちゃんは、すなおにお母かあさん
のいうことをききませんでした。

どこか、曇くもった空そらにも明あかるいところがあつて、すぐふに降ふりそう
に思おもわれません。お母かあさんは、新しん聞ぶんの天てん気き予よ報ほうには、どうなつ

ているかとそれを見ようとなさっている間に、もう正ちゃんもは、家を飛び出して、門を曲がってしまった時分であります。

「やはり、くもり後雨とある。なぜこう、いうことを聞かない人でしよう……。」と、お母さんは、ひとり言をされました。

まだ、正午にもならぬうちから、はたして雨は降り出しました。はじめは細かで、目にはいらぬくらいでしたが、だんだん本降りになってきました。いくら元気な正ちゃんでも駈け出してくるわけにはいかないのです。

「おとなしく、雨マントを持っていつてくれればいいものを……。」

お母さんは、子供の身の上を心配なさいました。そして、も

う学校がっこうの退ひける時じぶん分に、女じょちゆう中ちゆうに向むかつて、

「きくや、ご苦くろう労ろうでも学がっこう校こうまでマントを持もつていつておくれ。

そして帰かえりに、どこか、げた屋やへ寄よつて、あの鼻はな緒おの切きれたあしだの鼻はな緒おをたてかえてきてくれない。」といわれしました。

晩ばんの仕した度たくをしかけていた十八じちはちばかりになる女じょちゆう中ちゆうは、奥おくさま

のいいつけに従したがつて、さつそく汚よごれた前まえかけをはずして、出でかけ

る用意よういにとりかかりました。まだ、この家うちに奉ほう公こうして、三みつ月つきと

たたないので、坊ぼっちゃんちゃんの学がっこう校こうをよく知しらないのです。それで、

奥おくさまさまから道みちを聞きいて、雨あめの降ふる中なかをげたをさげ、マントを抱かかえ

て出でかけてゆきました。

もう、そろそろ授じゆぎ業ぎようが終おわつて、退ひけかかるので、おきく

は、坊ぼっちゃんが出てくるのを学がっ校こうの入り口ぐちで立たって待まっていていました。風かぜの吹ふくたびに冷つめたい雨あめのしぶきが、彼かの女じよのほおにかかりました。天てん氣きのよくない日ひは、あたりが暗くらく、日ひがいつそう短みじかいように思おもわれたのです。小鳥ことりがぬれながら、あちらの木きの枝えだにとまりました。

「いまごろ弟おとうとは、どうしたろう……。 」と、おきくは、故郷こきようのちい小おとうとさな弟おとうとのことを思おもい出だしました。

こちらへくるまでは、雨あめが降ふったときは、やはりこうして弟おとうとを迎むかえにいったのでした。自分じぶんがこちらへきてしまつてから、もはや降ふつても、だれも迎むかえにいつてやるものがありません。母親ははおやは、まだ幼おさない弟おとうとの守ももりをしながら、内職ないしょくに忙いそがしいからです。

そして、北国は、いま冬の最中でした。こちらは、梅の花が咲きかけているが、そして雪ひとつないが、北国は、明けても暮れても、雪が降っているのであります。

「ほんとうに、弟は、どうしているだろうか？　もう、学校から、家へ帰った時分かしらん。」

こんなことをぼんやりと考えているとき、坊ちゃんが、彼女を見つけて、

「ねえや、マントを持ってきてくれたの、ありがとう。」
 て、元気よく受け取って被ると、お友だちといっしょに話しながら、さつきとおきくを後に残していつてしまいました。彼女は、その活発な子供らしい姿を見送って、ほほえんだのであります。

た。

その夜の^よこと、明^{あか}るいランプの下^{した}で、家^{うち}の人^{ひと}たちは、楽^{たの}しく語^{かた}り合^あったときに、正^{しょう}ちゃんはおきくに向^むかって、

「ねえや、おまえには弟^{おとうと}があるの？」と、ききました。すると、
彼^{かのじよ}女^よは、赤^{あか}いほおに、笑^{わら}いを浮^うかべて、

「今年^{ことし}九^こつになる弟^{おとうと}が^あります。このごろは、雪^{ゆき}の中^{なか}を毎^{まい}日^{にち}、
学^が校^{っこう}へい^いつて^います^ます^すで^でし^しょう^う。」と、答^{こた}え^えま^まし^した^た。

村^{むら}から、学^が校^{っこう}へ^へゆ^ゆく^くに^には、原^{はら}を^を越^こさ^さな^なけ^けば^ばな^なら^らな^ない^い。そ^そこ
は、い^いつ^つも^も風^{かぜ}の^の強^{つよ}い^いと^ところ^ろだ。あ^あの^の小^{ちい}さい^いの^のに^に、ど^どう^うし^して^て、そ^そこ
を^を通^{かよ}う^うこ^こと^とだ^だら^らう^うと^と思^{おも}う^うと、彼^{かのじよ}女^よの^の心^{こころ}は、暗^{くら}く^くな^なり^りま^まし^した^た。

「そ^そん^んな^なに^に雪^{ゆき}が^が降^ふる^るの^の？」と、正^{しょう}ちゃん^んは、目^めを^をま^まる^るく^くし^した^たの^ので

す。

「たくさん降ります。三尺も四尺ももつと降ることがあります。」
と、おきくは答えた。

「たいへんだね。」

「たいへんでございます。」

「どんな雑誌をとっているの……。」と、正ちゃんは、雑誌を見ながらききました。

おとうと
「弟ですか？ 雑誌なんかとっていません。貧乏で、とつてやることができないのですもの。」

これをきくと、正ちゃんは、だまっていたましたが、本箱の中から、幾冊かの雑誌を取り出してきて、おきくの前に置いて、

「僕の読んだ、古いのだけど送っておやりよ、ね。」と、しんせつにいいました。

「ああ、それはいいことだよ。」と、正ちゃんのお母さんもそばからいわれました。

「どんなにか、喜ぶことでしょう。」と、おきくはいつて、いくたびも頭を下げたのです。

みんながやすんでから、彼女は自分のへやにはいつて、ふるさとへ出す手紙をしたためました。それには、

「いまいる家の坊ちゃんは、やさしくて、おりこうで……。」と書いて、弟にいつてやろうとしましたが、彼女は、ふと筆を止めて、考えました。そして、それを破りました。

ちい おとうと 小さな弟が、かぜ 風と雪と戦たたかつて、やつと家うちに帰かえると、すぐすえに末の弟おとうせわの世話をさせられることを思おもうと、もう、なにもいうことができなかつたからです。

「わたし私がいなくなつてから、おとうと弟が、かあお母さんの手助てだすけをするのだもの……。」

かのじよ彼女は、目めに涙なみだを浮うかべました。そして坊ぼっちゃんから、おまえにくだされたのだと簡かん単たんに書かいて、それから、からだ体を大だい事じにするようにといつてやりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「国民新聞」

1931（昭和6）年2月1日

※表題は底本では、「おきくと弟《おとうと》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おきくと弟

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>